

漢方医

練馬総合病院 漢方医学センター長

中田英之

私は、今、漢方医を名乗っている。この科学技術が進んだ時代になぜ漢方医なのか。私の漢方との出会いを中心に話してみたい。

【さまよえる患者との出会い】

漢方を始める前、私は自衛隊医官として産婦人科医をしていた。産婦人科では、腫瘍と不妊治療が二大グループで、臨床、研究を盛んに行っていた。外来から入院までの業務フローは極めて合理的に行われており、テキパキと腫瘍の鑑別がなされ、緊急度に応じて手術日程が決められて手術、術後抗癌剤の治療が行われていた。また、不妊治療もちょうど顕微受精が盛り上がるところで、懸命に不妊治療が行われていた。したがって、最前線の婦人科外来では、これらの積極治療の患者を如何に手際よく診断することが重要であった。そんな中で、癌でもなく、ましてや良性腫瘍でもなく、不妊でもなく、感染症でも無い原因不明の痛みや眩暈などの患者は、更年期障害の病名が付くものは良い方で、大抵は十把一絡げに「不定愁訴」の枠組みの中にまとめられ、有効な治療がある訳でもなく、ただ抗不安薬と鎮痛剤を処方され、時に疎ましい存在ですらあった。そこでは、極端な場合には、「痛みの原因が無いから、痛むはずはない。」という理屈が適用され、多くのさまよえる患者が生み出されていた。「痛いものは痛い。」患者は嘘をついている訳ではない。私は、強くそう思ったのだが、当時の私には、治療アイディア一つある訳でも無く、ただ見守るしかなかった。しかし、同時にこの隙間に落ち込んだ人達を救い出すのに、何か方法があるはずだとも感じていた。

【スポーツ漢方医学・・・漢方への目覚め】

その後、私は自衛隊勤務の関係で仙台に異動となった。小規模の病院勤務だったこともあり、暫くの間、大学病院で感じていた事も忘れていたのだが、漢方との本格的な出会いはひょんなことからやってきた。当時、自衛隊では士気高揚の為、中央駅伝という大きな駅伝大会を二年に一度開催しており、その大会に優勝するために各部隊がしのぎを削っていた。そんな中、万年下位の女子

駅伝チームの記録向上のサポートをして欲しいと依頼を受けたのだった。常勝チームと比べると、圧倒的に部員の人数も少ない上に故障者が続出し、まともな練習が出来ていない惨憺たる状況であった。このチームを優勝させる！というのが、私に与えられた課題であったのだが、産婦人科の臨床の傍ら、少しずつ漢方について学び始めていた私は、すぐに漢方を応用することの可能性に気がついた。「未病」、全てはこのキーワードに繋がっていた。長距離ランナーの管理の要点は2点に集約することが出来る。一つは、怪我の防止。成績が伸び悩むことでつい、限界を超えた練習をしてしまい、疲労骨折、肉離れなどを引き起こしてしまう。もう一つは、怪我の一步手前まで追い込む事。競技の目的は健康ではなく、勝利することである。従って、健康を目的とした運動とは本質が異なり、生ぬるい走り方をしてもタイムをのばすことは出来ない。怪我一步手前まで追い込みつつも、怪我を予防するというこのバランスをどう取るかが、勝敗を決することになる。訓練前後に採血を行い、客観的指標を軸にしつつも、同時にトレーナーの直感的印象とすりあわせる作業を行うことで、選手にかかる負荷を把握し、適切な漢方を処方する作業を継続した。その結果、2年間の担当の間に、5000m記録を平均1分30秒更新する事が出来、大会においても準優勝を果たしたことは、私のその後の漢方医生活に大きな影響を与えることになった。(プロジェクトの詳細内容については、<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006163698>)を参考にされたい。)私は、この仕事を最後に自衛隊と別れを告げて本格的に漢方医を目指すことになった。

【漢方医への道】

自衛隊を去って、本格的な漢方医の道を選んだ私の目の前に現れたのは、大勢の「さまよえる患者」達であった。頭痛薬が効かなくなってしまった片頭痛患者、原因不明の眩暈、耳鳴り、何年経っても治らない五十肩や手術しても治らない腰痛、PMS、不妊症、不明熱、アレルギー症状、etc.。この患者に対して何らかの結果を出すのが、漢方医の任務である。まだ、漢方臨床経験も浅い私は、教えられた口訣などを頼りに試行錯誤を続ける苦悩の日々が続いた。そのうち、私が今経験していることの多くは、既に古典に書かれている事実が殆どであることに気が付いた。それも、数十年という単位ではなく、数百年という単位で。もちろん、それぞれの古典にはその文献が書かれた時代背景があり、文言そのままに利用できる訳ではないが、時代背景を考慮し、記載された状況を想像することで、応用できることが分った。それ以降、私は、行き詰まると

古典をひらくようになっていった。このように書くと変に思う方がおられるかも知れないが、古典の中には、哲学書に分類される「老子」や宗教書に分類されるキリスト教の「聖書」も含まれる。その思考過程が参考になるのだ。ちなみに「聖書」に関しては治療に関連する奇蹟の記述部分には参考になるところが多い。漢方医になって改めて新約聖書を読んだとき、治療者としてのキリストの人間像を垣間見た気がして、嬉しく思った記憶がある。古典を読むことで、実は何百年も前から変わることなく、同じ症例が掲載されており、当時の医師も我々と同じ苦勞して治療していたことが分かった。何のことはない、人間はいつの時代も同じなのだ。そう、思えるようになった時から、私は、漢方医を名乗るようになった。

【漢方医の役割】

漢方の勉強を志す人に対して、常々私は、西洋医学は「光」であり「表」で、漢方医学は「影」であり「裏」であると言いつけている。バスケットでは、シュートする選手が居るからこそ、リバウンドを拾う選手がいる。光無きところに影は出来ないし、シュートする選手が居なければ、リバウンドは拾うことが出来ない。だから、漢方医はけっして前に出る存在ではないのだと。しかしながら、100%シュートをゴールできる選手は居ないし、光が当たれば、必ずそこには影が出来る訳で、必ず漢方医の役割は存在する。漢方医は永遠に必要な存在であると私は確信している。目下の私の密やかな目標は、リバウンドを全て拾うことである。